来て！見て！図書館

（としょかん）

開館時間

午前9時～午後7時

休館日

1月1日(木)～3日(土)・5日(月)・13日(火)・19日(月)・26日(月)、2月2日(月)・3日(火)・9日(月)

※休館日の図書の返却はブックポストをご利用ください。

（年末年始を除く）

●図書館●

佐間3―24―7（「みらい」内）

TEL：556―4227

FAX：555―3770

令和8年 ブックスタート

▶日　　時　第1、4水曜日午前10時～正午
▶場　　所　図書館ミーティングルーム
▶内　　容　絵本を1冊プレゼントします。
▶対　　象　生後2カ月以上1歳未満のお子さんとその保護者
▶持 ち 物　母子手帳
▶そ の 他　絵本の読み聞かせの後に育児相談を行います。

図書館の本は地域公民館でも「受取」と「返却」ができます

市立図書館で所蔵している貸し出し可能な図書・雑誌は地域公民館でも受け取りと返却が可能です。※ 紙芝居、CD、DVD、カセットテープ、他の図書館の本は対象外です。

また、大きいサイズの図書はお断りする場合があります。

詳しくは図書館ホームページをご確認ください。

新しいブックリストを作成しました

図書館では新しいブックリストを作成しました。赤ちゃん用から中・高校生向けまでの7種類のブックリストを用意し、配布しています。ぜひご利用ください。

▶**配布場所**　図書館（図書館ホームページからダウンロード可）

ぎょうだ電子図書館が4周年を迎えました

ぎょうだ電子図書館は自宅や外出先から、お手持ちのパソコンやタブレット、スマートフォンを使って電子書籍を楽しめる、インターネット上の図書館です。文字の拡大や音声読み上げ機能の他、期間限定のコンテンツもありますので、ぜひご利用ください。

利用するには、IDとパスワードが必要です。行田市立図書館利用カードをお持ちの市内在住・在勤・在学の方は、利用カードの番号がID、生年月日8桁がパスワードになっています。

行田歴史系譜 382

資料がかたる行田の歴史 82

古代の南河原

現在、旧南河原村域には26の遺跡が埋蔵文化財包蔵地として登録されており、これまでに5回の発掘調査が行われています。その成果を基に、今回は発掘調査で分かった古代の南河原を紹介します。

古代の南河原は、縄文時代晩期（3000～2400年前）から始まります。縄文時代晩期の土器が少量のみ発見されているだけで、確実に人々が暮らし始めたとは言いきれませんが、おそらく南河原の地で活動していたであろうと推測できます。

次は時代が下って、古墳時代前期（1700～1600年前）において、人々の活動の痕跡が残されています。ただ縄文時代と同じく、住居跡などの痕跡は確認できていませんが、当該期の土師器が出土しています。その中には東海地方で生み出された土器があり、南河原の外から人々が、最先端の農業技術とともにその土器を携えて、肥沃な低地へと進出してきたと思われます。

そして、古墳時代中期（1600～1500年前）の終わり頃、突如として、とやま古墳が出現します。とやま古墳は墳丘長69メートルの前方後円墳で、埼玉古墳群の稲荷山古墳と相前後する時期に築造され、市内で最も古く造られた古墳のひとつです。当時南河原周辺では、これほどまでに大きい古墳を築造できる首長が統治しており、首長を支えるムラがどこかにあった可能性が高いと考えられます。

その後、平安時代（1200～800年前）になると、条里制に伴う水田が作られました。ほ場整備前には、水田区画の痕跡が馬見塚を中心に、南河原字前から犬塚字南・米九斗まで広範囲にわたって確認できました。条里水田周辺に住んでいた人々は、お米を作り租税として納めていました。

南河原における先人の足跡は、今はまだ断片的な資料でしか語ることができませんが、地中深くに眠っている遺跡から新たな発見があれば、古代の南河原をより鮮明に物語ってくれることになるでしょう。

（郷土博物館　篠田泰輔）

平成22年度南河原条里遺跡発掘調査風景

いきいき行田人（ぎょうだじん）

ものづくりの魅力を伝える

石川　尊央さん（本丸・28歳）

令和7年7月に元足袋販売店の牧野本店でオープンした『日々新た』。このお店は、もんぺや靴下、木製の食器など伝統的な手工芸品が並ぶ、新しいものとの出会いやものを通じた新しい発見をコンセプトにしたセレクトショップです。今月はこのお店の店主・石川尊央さんを紹介します。

石川さんは市内出身で体育の教員になることを目指して大学へ進学。卒業後は国外でさまざまな経験を積みたいという思いから令和元年にJICA海外協力隊に入り、ヨルダンでパレスチナ難民の子どもたちに体育を教えていました。しかし、世界的な新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、8カ月で帰国となりました。

その後、酪農の手伝いや移住体験などをする中、山口県下関市で硯（すずり）を作る職人と出会いました。作り手が語る歴史や情熱、そしてなによりその技術を目の当たりにしたことがきっかけでものづくりへの興味が膨らんでいきました。

「ものづくりを伝える拠点を作りたい」と高まる思いの中で開業を決意。その準備として魅力の伝え方や販売方法を学ぼうと、作り手と使い手をつなぐ活動をする福岡県八女市の会社に入社し4年間を過ごしました。

「生まれ育った行田でお店を」と思い続けていた石川さんはついに行田の伝統産業である足袋屋「牧野本店」と出会い、昨年7月に『日々新た』をオープンしました。ここは「お店で知った小さな何かが新しい何かに繋がったら面白いなと想像しながらいろんな場所のいろんなものを集めているお店」と語る石川さん。足袋屋の面影残る太い柱が印象的な店内には、石川さんが日本各地の作り手と直接話をし、これだと感じた選りすぐりの逸品が並びます。「ここが皆さんの新たな発見や、ものを通じた交流の場になったらうれしい」と笑顔で話します。

温かく丁寧に、愛情を込めてつくられた商品たち。そして石川さんのこだわりや経験の結晶として開店した『日々新た』。石川さんはこれからも素材や製法、背景にある物語などの「ものづくりの魅力」を歴史ある行田市から発信していくことでしょう。

俳行壇田（ぎょうだ はいだん）

俳句応募方法

一人3句以内。住所・氏名（ふりがな）・電話番号を明記の上、はがきまたは封書で広報広聴課まで。**※毎月末日必着**

なお、一部添削して掲載する場合がありますが、不要であれば「添削不要」と記載してください。

母とゐるただそれだけの小春かな　　緑町　松林　真弓

【句評】人生を達観しているような穏やかな一句である。俳句づくりのポイントは一句の中に季語が生かされているかという点にある。掲句は季語の小春が絶妙な働きをして一句を形成している。小春日和のほっこりとした充足感が母に寄り添う作者の心情を代弁しているのである。平明な詠嘆ではあるが、さり気なき情感の滲む一句となっている。

鐘ひとつ撞くための列去年今年　　荒木　小林　康男

【句評】大晦日の夜鐘楼のある寺には近楼の人々が集い列をなす。百八の除夜の鐘を打つためである。一人が一打ずつ撞くために長い行列をつくり順番を待っている。しかし、人々はたった一打に過ぎ去っていく年への思いと新年への夢を託すのである。未知なる年の前夜、神仏と人間が一つになる瞬間でもある。去年今年の季語が厳かな雰囲気を醸している。

人里の馳走もとめて熊闊歩　　渡柳　大西　道子

【句評】秋以後、今年ほど熊の出没のニュースで賑わった年はないだろう。人々の生活が脅かされる深刻な社会問題となっているのである。こうした背景の句で注意しなければならないのは殺すとか駆除とかの直接表現は避けることである。その点、掲句は熊闊歩でとどめていて遭遇の恐怖と注意を喚起するようなつくりとなっている。結界破りは共に不幸である。

秋あかね竹のそよぎや風白し　　忍　大澤　由子
夜祭りの鉦鼓とどろく秩父郷　　谷郷　羽石　芳道
小春日や「ただいま」と妻退院す　　富士見町　江利川敏夫
わさわさと音ごと掃けり柿落葉　　棚田町　川鍋　幽覚
貼り足しの切手一枚年詰まる　　門井町　宮田　淑尚
先達の奇北巡（つ）りし利根の秋　　棚田町　奈良佐智子
白杖の足取りしかと冬の駅　　長野　鎌田　昇

（三沢一水 選評）